

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2025 年度
氏名	大久保 花	指導教員 (主査)	浅見祐香専任講師

論文題目	オンライン脱抑制による SNS における攻撃性の増大効果に対する居場所感の影響
------	--

本 文 概 要
【問題意識・研究目的】近年、青年の新たな問題行動としてインターネット上における攻撃行動であるサイバーアグレッション (Cyber Aggression ; 以下, CA とする) やネット荒らしが注目されている。CA は, SNS 等を通じて行われる攻撃行動であり, ネット荒らしは「インターネット上で他人を意図的に挑発し, 争いや感情的な反応, コミュニケーションの分断を引き起こす行為」である。ネット荒らしは CA の中でもより意図的かつ悪質な行為を指している (増井他, 2019)。これまで, CA やネット荒らしに関しては, サディズム傾向や Dark Triad 傾向などのダークパーソナリティの影響が大きいことが示唆されていたものの, 変容し難い特性であることを踏まえると, 介入によって変容可能な要因を検討することが必要であると考えられる。この点に関して, 対面場面では存在する行動抑制がインターネット上では緩和・消失するオンライン脱抑制 (Suler, 2004) や, 居場所感の低さが社会性の低下や攻撃性の増幅と関連すること (藤・吉田, 2009) が指摘されている。しかしながら, ダークパーソナリティの影響を統制した上で, これらの比較的可変可能な要因が, CA やネット荒らしにどの程度関与するかについては十分に検討されていない。そこで本研究では, ダークパーソナリティの影響を統制した上で, オンライン脱抑制および居場所感が CA やネット荒らしに及ぼす影響を検討することを目的とする。 【研究方法】リサーチ会社にモニター登録している 18 歳から 25 歳の男女 427 名 (男性 211 名, 女性 216 名, 平均年齢 22.49 歳, SD=2.21) を分析対象とした。調査材料は, ①フェイスシート: 年齢・性別・使用している SNS の種類, SNS における発信頻度, 匿名アカウントの有無 ②多次元オンライン脱抑制尺度 MMOD (温・三浦, 2023) ③Cyber Aggression Scale (怒りの発信, 自己顕示の 2 因子に分けて分析) (濱口・金子, 2021) ④日本語版ネット荒らし尺度 (増井・田村, 2019) ⑤日本語版 Varieties of Sadistic Tendencies (下司・小塩, 2016) ⑥社会的居場所尺度 (原田・滝脇, 2017) ⑦日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (田村・小塩, 2015) を用いた。また, 目白大学人文社会科学系研究倫理委員会による承認を得て実施した (24 人研究-032)。 【結果・考察】オンライン脱抑制および居場所感が CA (怒りの発信, 自己顕示) やネット荒らしに及ぼす影響について検討するため, CA 「怒りの発信」, CA 「自己顕示」, ネット荒らしをそれぞれ従属変数として, Step1 で性別, 発信頻度, 匿名の有無, サディズム傾向, Dark Triad 傾向, Step2 でオンライン脱抑制と居場所感, Step3 でオンライン脱抑制と居場所感の交互作用項を投入して階層的重回帰分析を実施した。その結果, CA 「怒りの発信」に対しては, オンライン脱抑制と居場所感の交互作用は有意ではなかった。一方, CA 「自己顕示」およびネット荒らしに対しては, オンライン脱抑制と居場所感の交互作用が有意であり, 居場所感が高い場合にオンライン脱抑制が高いほど自己顕示的な CA やネット荒らしが高まることが示された。これらの結果から, CA 「怒りの発信」は居場所感による調整効果を受けにくく, オンライン脱抑制によって感情的反応が表出されやすい行動である可能性がある。その一方で, CA 「自己顕示」は, 居場所感を背景として自己の存在を他者に示そうとする行動がオンライン環境において増幅されることで促進される可能性が示された。また, ネット荒らしにおいては, 居場所感が高い場合において, オンライン脱抑制が高いと攻撃行動が促進されており, 逆に居場所感を高めた上で, オンライン脱抑制を下げることによって, ネット荒らしを低減できる可能性が示された。